

出題のねらい

【1】古代、政治・文化の分野

仏教公伝および法隆寺関連の史料を手がかりとして、当時の政治・文化に関する基礎的な知識を問いました。

【2】近世、文化の分野

江戸時代における洋学の受容のありかたと、幕府の政治姿勢の関係が理解できているかを問いました。

【3】近代、社会の分野

近代における都市民衆騒擾に関わる動向を取上げ、近代社会史の基礎知識を問いました。

【1】

【解答】(41点)

- | | |
|---|--------|
| (1) 日本書紀 | (3点) |
| (2) 六国史 | (3点) |
| (3) い | (3点) |
| (4) b う c い | (3点×2) |
| (5) 銅や青銅に鍍金(金メッキ)を施したもの。 | (8点) |
| (6) 欽明天皇 | (3点) |
| (7) d 推古 e 厩戸王(聖徳太子) f 蘇我馬子
g 小野妹子 h 鞍作鳥(止利) | (3点×5) |

【解説】

仏教公伝を伝える史料は、いくつかありますが、本問では史料 A として『日本書紀』を掲げました。国史の編纂は、飛鳥時代に始まったと言われます。天武朝には史局が開設され、それが『日本書紀』となって720年に完成しました。以来国史の編纂が継続され、10世紀初めまでに、『続日本紀』『日本後紀』『続日本後紀』『日本文徳天皇実録』『日本三代実録』が編纂されます。これらを総称して「六国史」と呼びます。

『日本書紀』仏教公伝の記事には、6世紀半ばの内外の状況を知る手がかりが潜んでいます。たとえば、百済国王が仏像・経巻等を送ってきたという記事は、当時の国際情勢を反映するものです。当時、百済は高句麗・新羅と対立していたため、日本との修好は不可欠であり、一方日本は中国との直接交渉を断っていたため、百済を介してしか大陸の文化を輸入できない状況にありました。そこで6世紀には様々な文化が百済を通して日本に伝えられました。仏教もその一つです。また仏教受容の可否をめぐる蘇我氏と物部氏が対立したという記事は、国内での豪族間の対立を反映しています。結局は蘇我氏が実権をにぎり、やがて朝廷も仏教を保護するようになり、蘇我氏の飛鳥寺をはじめ、四天王寺・法隆寺などの寺院が出現します。

法隆寺の由来を知る史料は乏しく、不明のことも多いのですが、本問では史料 B として、金堂の薬師如来像後背銘を掲げ、そこに登場する推古天皇や厩戸王(聖徳太子)を取り上げ、彼らが蘇我馬子と協力して行った政策に触れました。

一般入試／日本史(中期)

[2]

【解答】(39点)

- | | | | | |
|-----|------------------------------|--------|----------|---------|
| (1) | a 徳川吉宗 | b 杉田玄白 | c 解体新書 | |
| | d 平賀源内 | e 伊能忠敬 | f 蛮書和解御用 | (各3点×6) |
| (2) | シーボルト | | | (3点) |
| (3) | 松平定信 | | | (3点) |
| (4) | オランダ | | | (3点) |
| (5) | 長崎 | | | (3点) |
| (6) | 林子平 | | | (3点) |
| (7) | 渡辺崋山『慎機論』あるいは
高野長英『戊戌夢物語』 | | | (6点) |

【解説】

近世の文化に関する問題です。この問題では、文章Aと史料Bを組み合わせることで、江戸時代における洋学の受容のありかたと外交政策の関係が理解できているかを問いました。

文章Aは、徳川吉宗が進めた蘭学受容に関する基本的事項や代表的な蘭学者の業績を説明したうえで、幕府の政治姿勢との関係を説明したものです。史料Bは、松平定信の『字下人言』の一文です。実学としての蘭学の有用性と幕政批判に繋がりがかねない蘭学の危険性の二面性を説いています。この考え方は、定信の祖父にあたる徳川吉宗から受け継いだものでした。定信による寛政の改革が、吉宗による享保の改革を理想に掲げて実施されたことをよく物語る一節です。

幕府は、吉宗や定信の考えに基づいて、外交政策に対する批判に厳しい統制を加え続けたため、蘭学は医学や測量技術など、実学的な側面のみを受容する傾向にありました。このように、外交政策と洋学の受容のありかたは表裏の関係にあるため、両者に関連づけながら覚えておくことがポイントとなります。

[3]

【解答】(20点)

- | | | |
|---------|---------|----------|
| a ポーツマス | b 富国 | c 日比谷焼打ち |
| d 大阪 | e 打ちこわし | f 吉野作造 |
| g 桂太郎 | h 護憲 | i 米騒動 |
| j 原敬 | | |
| | | (各2点×10) |

【解説】

近代における都市民衆騒擾に関わる動向に注目し、社会政治を中心に日本近代史の基礎知識を問いました。大正デモクラシーとよばれる時代状況が、都市民衆の生活環境とも関わりながら展開したことを理解できているかどうかを問うています。

一般に第一次護憲運動から男子普通選挙制の成立までを大正デモクラシーと呼びますが、普通選挙制の成立をきっかけに、労働組合法や小作法を成立させる運動が続く政党内閣時代をふくめて大正デモクラシーと言うこともあり、さらには、日露戦争の講和に反対した民衆運動をも含める見解もあります。大正デモクラシーとは、そのような時代の雰囲気であらわす言葉であると理解すべきでしょう。

eは近世に関わる事項ですが、異なる時代の類似事例を比べることで、理解が深まります。全体としては、abcで日比谷焼打ち事件、ghで第一次護憲運動、ijで米騒動を取り上げました。